

神社の杜(四十九)

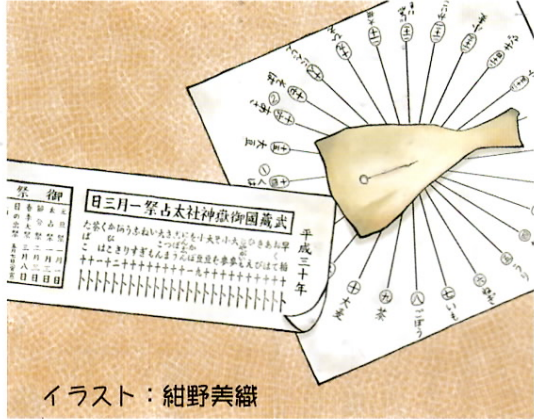
「太占(ふとまに)」(その二)

片柳 茂生

お祭り当日の夜が明けます。山の上の夜明け前はとっても寒いです。手や足の悴む中、祭員の皆さんは齋場や神饌の準備を行います。正月三日の日の出時刻は約七時、そうお祭りは日の出と共に始まります。

参進、修祓、開扉、献饌、祝詞奏上、普段と同じようにお祭りは進みます。でもここからが非公開。副齋主を本殿前に残し、齋主以下祭員、それと参列した神職は正面からのぼった太陽の先を、太占齋場へと進みます。

齋場に着くと新たにお祭りが始まります。神様には齋場の神籬に降りて来て頂き、簡単なお食事もして頂きます。そして齋主の祝詞奏上、それが終わると祭員の二人が骨と薪、炭を持って炉の東西に向かい合って座ります。炉の中には予め火付けのための杉の枯れ葉が置かれています。小さな移動用の火鉢の中から、昨晩熾した炭を取り出し、炉に入れます。薪も入れてさらに火を大きくします。火の状態を観察しタイミングを見計らって齋主は、火を鎮めるための鎮火祝詞を奏上します。それが終わるのを待つて祭員は炉の上に網をかけ、その上に骨を置きます。もう一人の祭員は、



イラスト：紺野美織

三種神寶祝詞を唱え始め参列した神職もそれに倣います。この祝詞は昔から神社で唱えられている祝詞で大口真神社のお祭でも唱えます。御岳山の神職なら誰でも空で唱えることが出来ます。この祝詞を三回唱えるのですが、その間、火が消えそうになっても息を吹きかけて火を熾そうとしてはいけません。あくまで成り行きに任せます。火にあぶられても何の現象もおきなかつた骨が、祭壇に捧げると、ピキツ・ピキツと罅が入る音が聞こえる時もあります。

すべての行事が終了すると神様には元の御座にお帰りたいだけ、太占のご神託は終了します。幣殿に帰り、お祭りの残りの次第も終了し、齋主らが社務所に戻って早々、昨晩骨の形を写した紙に罅を書き写します。ここでやっと算盤の出番になるのですが、悲しいかな今は電卓にその役を取って代わられてしまいました。あらかじめ引いておいた線を罅がどのくらいの割合で分断しているかで、その作物の出来具合を計ります。いかがでしたか？これが太占祭の模様です。前号の最初に書いておきました今年の気象予想、それと占いによる作物の出来不出来、今年皆さんの処ではいかがだったでしょうか？当たるも八卦、当たらぬも八卦。占いですものね。でも六年前の太占祭ですが、実は骨の中心部分が丸焦げで散々な結果だったのです。六年前は何がありましたっけ……。

表紙写真

「奉納芸能」

酉年式年大祭を祝し、伝統あるお囃子をご奉納いただきました。さいたま市西区「清河寺囃子連」

撮影・鶴巻育子

あ と が き

式年祭を迎え、社殿も美しく生まれ変わりました。古より伝えられたものを再生し、また次の世代に継承する。形のみならず、その魂や精神をも継承していくのです。神道には、古代から培われてきた日本人の智慧や価値観が息づいています。時代に合わせ少しずつ変化しながらも現代に至っています。武蔵御嶽神社もそうであり、これからも時代の変化を取り入れながら継続していくのです。

不易流行
中野区 鷲宮御嶽講中 講元 大野道高様、鶴巻育子様、齋藤慎一先生、片柳茂生様、朝矢嘉史様 玉稿を有難うございました。

平成二十九年 九月二十九日発行
編集 武蔵御嶽神社
TEL 〇四二八(七八)八五〇〇
FAX 〇四二八(七八)九七四一
http://www.musashimikakejinja.jp/
印刷 (株)成和印刷